

〔草人木上〕一貴人高位の御客ならば、座敷を御出なさるゝとひとしく、勝手より亭主路地へ出、ぐりをひらき、くゞりの外につくばひて御供申、外迄出のり物に召、とく歸れと被仰所迄御供仕、又御馬に召候は、其所迄同道可申也。

〔客之次第〕一茶過てやがて正客大仁なれば、亭主又いまやうあらためて禮に行に依て、其前に相伴に行たる人はやく装束を著かへて、亭主方へ禮に行て、扱正客大仁の前へ行て禮可被申候、大略の位ならば、後の禮は、状までにてたがひにすませるもよし。

〔茶道望月集三十二〕一近衛應山公信初而宗旦の小座敷へ茶事に御成の時、宗旦は御會釋は御

迎何かは能愼て、小座敷の茶事は如常御會釋、申時、御茶濟て御尋には、茶事に臺天目にて點る事有と聞、夫は如何様成時する事と御尋有しに、且御請に、同輩の主客の時は、名物の臺か天目所持の者、其道具に付て會釋、又其御客貴高の御方なれば、御客へ對して、新敷茶碗、新敷臺にても臺天目にて點る事有之候と申上る、其時又夫は如何様の貴人への時、する事ぞと御尋の時、御前のごとく成貴客の時仕る事に候へども、今日ケ様の折は、此茅屋を一興として御成被下候時宜に候へば、茶道の徳を以、尊卑不相隔の道義を以、御會釋申上ル故常の草の茶事を興に御會釋申上ル事也、後刻廣座敷へ御成の時、薄茶は臺天目にて進上可申と申上る時、甚御感心と也、如此の心持なければ、愼としても茶の本意を失ふては益もなし、能々工夫可有、如何様の貴公の御方にても、御客の器量による事、茶道御功者なれば、とかく其期に臨て働を第一と可知也。

〔備前老人物語〕雲州の大守松平出羽守殿を、家老朝日丹波請待せしむる時、爐のわきの棚の茶具に薄茶茶碗をおき合たり、濃茶過てのち、かの茶碗にて進上せられしと也、丹波は利休の弟子なりとぞ。

〔客之次第〕一主君の御供にて數寄にあわば、路地の戸をも立寄てあけ、手水をもかけ申てよし、其